

岡崎むかし館

すい
水

とう
筒



水筒 (昭和前期)



岡崎むかし館 蔵

キャラクター水筒 (昭和50年代)



岡崎むかし館 蔵

水は人が生きる上でかかせないものです。水筒は水を携帯するための容器として、むかしから自然にあるものを工夫し利用していました。中国やヨーロッパ、中央アジアなどの遊牧民族は動物の皮革を、東南アジアなどでは竹やひょうたんなどが使われていました。日本では「すいづつ」などと呼ばれ、竹筒が用いられたそうです。1897年(明治30)頃には、アルミ製の水筒が登場します。東京砲兵工^{こうしょう}廠(兵器工場)で生産されました。軽くて丈夫なアルミ製水筒は、軍隊の行軍における必需品でした。戦時下において水筒は、まさに命を支える道具として携行されました。戦後のレジャー時代(1960年代)の到来により、水筒は行楽や遠足など楽しみと結びつく道具になります。昭和30年代に二重構造で保温・保冷効果のあるガラス製「魔法瓶」が普及し始めます。さらに、軽くて持ち運びのしやすいプラスチック製や丈夫なステンレス製水筒も普及します。昭和40~50年代にはテレビや漫画のキャラクターを描いたものも多数登場し、コップを使わずに飲めるストロー式の水筒も流行しました。現在はペットボトル飲料が普及し水筒を持ち歩くことが少なくなったといわれますが、小・中学校では今も必需品です。またエコロジーの観点からマイボトルとして水筒が見直されてきています。道具の素材や形態そしてイメージも時代(世代)により異なります。道具を通して、祖父母や親世代の話を聞いて、「むかし」と「今」を見る素材にしてみてください。

<参考文献> 『世界大百科事典』平凡社、2005年 『日本大百科事典』小学館、1986年

水資源機構 HP「水の資料館」水の道具>水筒」<http://www.water.go.jp/honsya/honsya/referenc/siryu/dougu/07.html>(2013.5.21 参照)